

家庭における幼児期の「いのちの学び」について

What are Japanese parents doing for young children's death studies?

杉 山 幸 子

要約 日本でも最近急速にいのちの学びが注目を集めているが、本来いのちの学びは家庭で営まれてきたものであり、家庭がその機能を失いつつあるために学校等に役割が移行してきたものであろう。だが、現代の家庭におけるいのちの学びの実態については、ほとんど研究がなされていない。本論では、幼稚園・保育所の保護者から得た「家庭で子どもにいのちや死について教えるために行っていること」に関する自由記述の回答(96件)について、テキスト分析とその結果の数量化(因子分析)によって検討した。その結果、11の因子(いのちの学びのタイプ)を見いだしたが、それらはさらに、宗教的な教えと儀礼によるもの、生き物の飼育や絵本など幼稚園や保育所での学びに通じるもの、テレビやゲームなど現代社会の世相を反映したもの、死とはどんなものかについての親から子への語りかけの4つのパターンに分けることができた。

I. 問 題

近年、「いのち」そして「死」という問題が広く注目され、教育の現場ではいわゆるデス・エデュケーションへの関心も高まっている。青森県を例にとると、平成16年に起きた長崎県佐世保市の事件をきっかけとして、同年「命を大切にすることを育む県民運動」がスタートした。これは幼稚園・保育所、学校、家庭、地域、企業・団体、マスコミ、県・市町村が母体となって、それぞれの立場から運動の推進を目指すものであり、参加団体は平成21年3月末で1,238を数えるという¹。

では、「命を大切にすることを育む」ために、具体的にはどのような活動が行われているのだろうか。平成20年度の活動報告書を見ると、抽象的な問題であるだけにその範囲は広く、交通安全指導や避難訓練、地域の巡回指導、声かけ・あいさつ運動、学校での性教育、保護者を対象とした講演など、さまざまなものが含まれている。幼児を対象にしたものとしては幼稚園と保育所による報告があり、これらに特徴的なものとしては、絵本の読み聞かせ、小動物の飼育、食育(野菜の栽培と調理)、

高齢者や障害者との交流をあげることができる。また、誕生会はその園でも行われているものだが、そこには生まれてきた喜びを感じたり、親への感謝を知るなどの意味が込められている。このなかで高齢者との交流と誕生会にはややイベント性があるが、読み聞かせ、飼育、食育活動など、どれも日常の保育の一部として子どもの生活に溶け込んでいるものであり、この日常性こそが幼児期のデス・エデュケーションの大きな特徴であるといえるだろう。

ここで、筆者は幼児期のデス・エデュケーションを「いのちの学び²」と呼ぶことにしたい。デス・エデュケーションは日本語では死の教育、生と死の教育、いのちの教育などさまざまな呼び方がされている。金森俊朗氏の「性の授業 死の授業」(1996)も有名である。デス・エデュケーションには身近な人の死や自分自身の間近に迫った死という問題に向き合うための、まさに「死への準備教育」(デーケン, 1986)という面もあるが、広い意味でとらえれば、「死を通して生を考える教育」(中村, 2003)というように、生=いのちの方にその焦点はあると考えられる。簡単に言えば、幼児期では「いのちの大切さを実感する」ことがその目標であろう。そして、幼児期のその特徴が日常性、すなわち、日常の中での自然な気づきにあるならば、教える側が主体である「教育」よりも、子どもが自ら「学ぶ」面に焦点を当てた言葉の方がふさわしいように思われる。このことは幼児期だけでなく、デス・エデュケーション全般にも当てはまるのではないだろうか。若林(2002)によると、アメリカでも最近では「教育」という言葉のもつ「教え導く」という印象を避

けて、death studyという言葉の方が定着しているということである。

さて、家庭におけるいのちの学びの担い手は主に親になるため、親がその必要性やあり方をどのように考えているかは重要な問題である。アメリカでは1960年代以降、ミネソタ大学における「死の教育と研究センター」の開設、雑誌『Omega』『Death Education』の創刊、E.キューブラー・ロスの『死の瞬間』の出版などがあり、急速に死の教育と研究が発展したが、その背景には死をタブー視して日常生活から切り離し、愛する者を失った悲しみに向き合うことを阻むような社会的状況があった。それがベトナム戦争による衝撃などがあって、「『死』を考えること」ということは、自分たちの生き方を見直すことにはほかならない、まさに人生そのものを考えることだ」という風潮へと大きく転換したのである(若林, 1986)。

McNeil (1983) が幼い子どもをもつ母親を対象に調査したところでは、母親たち自身が子どもの頃に死に出会ったとき、親がそのことについてきちんと説明してくれたという人は17%に過ぎず、41%の人は説明されなかったという³。一方で、彼女たちの約7割は家族や友人と死について「しばしば」もしくは「ときどき」話し合うと答えていることから、やはり60年代から80年代にかけて、死に対する態度に大きな変化が生じたことがうかがわれる。しかし、その彼女たちにしても、約8割の人は死について話すのに不快感を覚えるという。また、同じ頃に行われた別の調査では、幼児の保護者の多くがデス・エデュケーションに対して前向きな態度を有すること、一方で、子どもから死について質問されたり

関心を示されたりすることに対してためらいを感じていることが示された (Crase & Crase, 1982)。このように、デス・エデュケーションの必要性が認知されるようになって、特に子どもが幼い場合、親の不安や戸惑いは大きかったことが分かる。こうした事情から、日本でも広く読まれている『葉っぱのフレディ』や『わすれられないおくりもの』のような死をテーマにした絵本や、同じく翻訳されたグロルマンの『子どもに死を語る時 死ぬってどういうこと?』のような、子どもに死を教えるための手引き書が著されたのであろう。最近では約10年前のアイルランドの調査で、やはり保護者の多くがデス・エデュケーションを支持する一方で、子どもと死について話すことに対しては居心地の悪さを覚えると報告されている (McGovern & Barry, 2000)。

日本では1970年代から上智大学のアルフォンス・デーケン教授が「死の哲学」の授業を開始し、その著書 (デーケン, 1986) は日本におけるデス・エデュケーションの古典として知られているが、いのちの学びの学校現場への導入が本格的に検討され始めたのは1995年の阪神・淡路大震災以降のことである。兵庫県では震災とその2年後のA少年事件の衝撃から、全国に先駆けて「生と死の教育」が行われるようになった (兵庫・生と死を考える会, 2007)。そして、この動きが全国的に拡大したのは、平成14年度施行の小学校学習指導要領で死の教育に言及されたことや、冒頭でも触れた平成16年の長崎県の事件が大きく影響してのことであり、わずかここ10年ほどの動きである。甲斐 (2003) によると、彼女はホスピスボランティアの経験を基に、1997

年に訪問授業として「命について考える授業」を開始したが、当初は学校に依頼をしてもほとんど拒絶されてしまい、年間2校しか行えなかった。しかし、その後口コミで徐々に広まり、2003年の時点では全国の小・中学校から100件以上の申し込みが来ているという。このように、日本では2000年以降にいのちの学びの急速な進展があり、現在では小学校以上の学校教育についてはプログラムの紹介や実践の記録が次々と出版されている (例えば、種村, 1998; 吉田, 2002; 中村, 2003; 近藤, 2007; 梶田, 2009)。

こうした活動がマスコミで取り上げられたり、また、少年による凶悪かつ不可解な事件が相次いだりしたせいも、現在ではいのちの学びの必要性は保護者の間でも広く認識されており、それは幼児の保護者についても例外ではない。たとえば、林 (2010) が3歳から15歳までの子どもの母親を対象に調べたところでは、「いのちの教育」の認知度は低かったものの、家庭や学校で生や死について教える必要性はほとんどの母親が認めており、関心もひじょうに高かった。また、辻本・中谷 (2009) によると、幼稚園の保護者は子どものいのちの学びに対して肯定的な態度を有すると同時に、何をどのように教えていくべきかという内容や方法について困難や戸惑いを感じているといい、これは前述のCrase and Crase (1982) やMcGovern and Barry (2000) の報告と共通した傾向である。

若林 (1986) によると、アメリカでは幼児期から年齢に応じたデス・エデュケーションのカリキュラムと学習目標が設定されているという。日本の場合、幼児教育・保育の枠組みとして、幼稚園教育要領と保育所保育指針

があるが、後者の「保育のねらい及び内容」の「環境」の領域を見ると、「身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く」という項目があり、これが幼児のいのちの学びをほぼ規定しているといえるだろう⁴。先に述べた絵本の読み聞かせ、小動物の飼育、食育活動はすべてこの部分の解説に述べられているものである（注4参照）。

保育所保育指針では、指針を「保育所保育にとどまらず、他の保育施設や家庭的保育などにおいても、ガイドラインとして活用されることが期待される」と位置づけており、実際に家庭での子育てにとっても示唆に富む内容が述べられている。しかし、言うまでもないが、家庭と施設は同じではない。したがって、家庭でのいのちの学びには保育所や幼稚園とは異なる性質があるはずである。という

より、むしろ、「本来は子どもたちが誕生してから就学する前に、家庭内においても、家族との生活を通してデス・エデュケーションが自然に行われていた筈であった。しかし、現代では核家族化・病院で亡くなる人が多いこと・放課後に自然に触れて遊ぶ子どもが減ったことなどの理由から、従来維持してきた家庭におけるデス・エデュケーション機能が低下してしまっている」（竹松、2006）ために、家庭の外でのいのちの学びが重要になってきたのだろう。

では、現在の日本の家庭において、いのちの学びはどのような形で営まれているのだろうか。本論では、幼児をもつ親が家庭内でのようないのちの学びを実践しているのか、言い換えると、現代の親はいのちの学びとはどのようなものだと認識しているのかを探り、その内容について検討していきたい。

Ⅱ. 方 法

1. 調査の手続き

2007年に盛岡市と八戸市の保育園（2園）および八戸市の幼稚園（1園）において、園児の保護者を対象とした質問紙調査を行った⁵。本論では保護者から得られた「家庭でのちや死について教えるためにしていること」の自由記述式の回答の部分を分析対象とする。回収できた質問紙は3園で計142通だったが、この部分の記述が見られたのは96通だった。

2. 分析の方法

まず、すべての回答を回答者単位でエクセ

ルに逐語入力し、そのデータをIBM SPSS Text Analytics for surveys Japanese 4にインポートし、キーワードの抽出を行った。次いで、抽出されたキーワードを吟味して手作業でカテゴリを設定した。すなわち、カテゴリの設定はプログラムによる辞書的な基準ではなく、筆者の判断によるものである。基本的にはキーワードを基にカテゴリを作成したが、キーワードを使用している回答をそのカテゴリに含めるかどうかは一つひとつ内容を見て判断し、逆に、キーワードを使用しなくても、内容がそのカテゴリに当てはまると思われた回答はそこに含めるようにした。

また、後述するように、キーワードに依拠せず、直接記述の内容を見て構成したカテゴリ

もある。

Ⅲ. 結 果

96件の回答から24個のカテゴリを作成した（表1）。カテゴリは少なくとも2件以上の回答に当てはまるものとしたため、1件1件の回答を見ると、複数のカテゴリに相当するものがある一方で、どのカテゴリにも相当しないものもあった。

いのちの学びの「タイプ」を見いだすため、各カテゴリに「当てはまる・当てはまらない」を「1・0」に置き換えたデータを用いて因子分析（主成分分析、プロマックス回転）を行った結果、固有値が1以上の11個の因子が抽出された（表1）。累積寄与率は69%であり、因子間に有意な相関は見られなかった。また、因子得点を基に、各因子（タイプ）を代表する回答を抽出した⁶（表2）。以下に各因子について検討していく。

まず、第1因子には寺、地獄、仏壇などのカテゴリが高い負荷を示している。内容としては、地獄やえんま様というキーワードを用いた死後の世界についての語りが特徴的だが、このタイプに当てはまる回答は少なく、ほとんどが浄土宗や日蓮宗の宗教的背景を有していた。したがって、これは「仏教」の因子ともいえるが、おそらくかつては日本の多くの家庭でこのような語りがされていたと思われるため、「伝統的な教え」とした。

第2因子は比較的当てはまる回答が多いタイプで、墓参りに連れて行ったり、亡くなった祖父母について語って聞かせたりすること

を指す。「死者・墓参り」と命名したが、家族ならではの内容であり、第1因子とともに、本来のいのちの学びの中核をなすものであろう。「伝統的な教え」の方は衰退し、今や語られる家庭はごく少なくなっているが、身近な死者を悼み、また懐かしむ語りや儀式は今も家庭でのいのちの学びとして息づいているといえる。一方、第8因子の「葬儀への参列」は機会があれば子どもを法事や葬式に連れて行くというものであり、内容的には第2因子と近いが、いのちの学びに対するかなり意識的な態度を指しており、そういう意味で現代的なタイプといえるだろう。

第3因子の内容は明確で、キリスト教の教えを指すものである。ただし、そのなかでキーワードとして出てくる「天国」という言葉は、必ずしもキリスト教の家庭でなくても用いられていた。

第4因子は第2因子と並んで当てはまる回答が多いタイプであり、さまざまな生き物の飼育と死んだときの埋葬、そして、「ありがとう」という感謝の気持ちをもつことが関係している。「生き物の飼育」と命名したが、内容的にはむしろ「埋葬」「土に返す」ことの方に重点が置かれているようだ。いのちの軽視の象徴的な行為として、「死んだ金魚をトイレに流す」（近藤、2009）ことが話題になったことがあったが、生き物が死んだときにはきちんと葬ることが大切だという認識は現在も広く

表1 家庭でのいのちの学びに関する因子分析の結果

カテゴリ	主なキーワード	ケース数(%)*	I.伝統的な教え	II.死者・墓参り	III.キリスト教	IV.生き物の飼育	V.空から見守り	VI.テレビ	VII.機能の停止	VIII.葬儀に参列	IX.不可逆性	X.絵本	XI.言葉
寺	寺 浄土宗 日蓮宗	4(2.8/4.2)	.913	-.032	.014	.019	-.058	.099	-.004	-.013	.005	-.006	-.006
地獄	地獄 地獄絵 えんま様	4(2.8/4.2)	.855	-.052	.024	.036	-.095	.138	.000	.029	.044	.001	.007
仏壇	仏壇 位牌	6(4.2/6.3)	.504	.245	-.076	-.125	.217	-.098	-.003	-.147	-.185	-.035	-.050
墓参り	墓参り	6(4.2/6.3)	.201	.799	.004	.028	-.116	.014	-.126	.164	-.118	-.008	-.018
死者	祖父 じい 身内 叔父 骨	23(16.2/24.0)	-.095	.684	-.089	-.068	.215	-.226	.139	.211	.016	.013	-.014
質問	質問 聞かれら	6(4.2/6.3)	-.233	.644	.017	-.012	-.112	.298	-.030	-.089	.063	-.017	-.005
キリスト教	キリスト教	2(1.4/2.1)	.005	-.070	.873	-.160	-.152	-.102	.042	-.061	-.164	-.003	-.008
魂	魂	2(1.4/2.1)	.052	-.112	.786	.019	.175	-.068	-.025	.282	-.013	.008	.016
天国	天国	5(3.5/5.2)	-.070	.275	.587	.087	.082	.182	.002	-.143	.146	.017	.010
埋葬	土 埋める	11(7.7/11.5)	.046	.021	.034	.826	.119	-.112	.017	.137	.026	-.030	-.056
生き物の飼育	飼う 金魚 生き物 ペット	24(16.9/25.0)	-.032	-.072	-.153	.765	.040	.038	-.082	-.009	-.075	.018	-.061
感謝	ありがとう	3(2.1/3.1)	.002	.087	.035	.551	-.227	-.038	.424	-.071	-.190	-.079	-.053
見守り	見守って 見て	9(6.3/9.4)	-.044	.112	.001	-.101	.853	.075	.089	-.082	-.105	-.010	.005
空	空星	7(4.9/7.3)	-.038	-.213	.014	.222	.834	.202	-.024	.032	.031	-.024	-.007
ニュース	ニュース	5(3.5/5.2)	.187	.062	-.020	.003	.231	.807	.047	-.095	.092	.044	.035
テレビ	テレビ ドラマ 番組	18(12.7/18.8)	-.040	-.032	-.090	-.164	-.042	.690	.134	.451	-.216	-.027	-.030
悲哀	悲しい かわいそう さみしい	8(5.6/8.3)	-.099	-.122	-.001	.011	.142	.026	.758	-.122	-.172	.008	.021
機能の停止	**	12(8.5/12.5)	.129	.083	.039	.003	-.059	.170	.635	-.043	.263	.021	.020
葬儀	葬式 葬儀 火葬	6(4.2/6.3)	-.023	.178	.059	.089	-.040	.027	-.123	.931	.039	-.019	-.024
汎生命	**	9(6.3/9.4)	-.029	-.028	-.069	-.049	-.063	.050	-.102	-.026	.823	-.094	-.100
不可逆性	**	3(2.1/3.1)	.044	-.102	-.059	-.114	-.014	-.149	.387	.153	.548	.043	.020
人間関係	友だち 家族	3(2.1/3.1)	-.025	-.046	.039	-.122	-.009	.041	.040	-.052	-.084	.878	-.264
絵本	本 絵本 フラントースの犬	7(4.9/7.3)	.014	.066	-.055	.168	-.049	.000	-.041	.047	-.032	.630	.388
言葉	「死ぬ」「死ね」言葉	4(2.8/4.2)	-.016	-.035	.012	-.131	.002	.026	.032	-.036	-.099	-.109	.939

* ()内は全回答者に対する割合と、記述があった回答者に対する割合

** キーワードに依拠せず、記述の内容からカテゴリを作成したものと

表2 各因子の代表的記述

因子	記述
伝統的な教え	一緒に植物を育てたり、祖母と2ヶ月に1回くらいのペースでお寺に行く機会があるので、「死んだらこのお墓に入って別の世界へ行ってしまうこと、お父さん、お母さんとは暮らせないこと」を地獄絵図などを見せて話している。 死んでから、えんま様に会って、悪い事をしていないか調べるんだよ、と話している。自分のルーツを家系図にして話したことがあります。(自分がどのように存在するのか)
死者・墓参り	自分の親が早くに亡くなったので、子供が小さい頃からお墓参りに行っている。その時に、おじいさんは死んでしまったので会うことはできないけれど、いつでも守ってくれているということを話している。子供はまだはっきり理解できていないが、死ぬことについて聞かれた時にはちゃんと話すようにはしている。 特に教えた事はないが、祖父が亡くなっているので「死んで天国にいるんだよ」と言っている。子供はお墓参りに行くとおじいちゃん元気にしてるかな?と言いながら手を合わせている。
キリスト教	人は死を迎えても魂は永遠に生き続けること。毎日曜に教会へ行くので、自然と神の存在や天国について受け入れている様です。
生き物の飼育	飼っていた金魚が死んだ時、いっしょに庭に穴を掘って埋めてあげた。それ以来、テレビとか話のなかで、「死んだら金魚さんのお星さまになるんだね」と言うようになった。死んで、天国に行くんだよ、と言うと、涙を流しながらさよならをしている。 子供がつかまえた昆虫などが死んでしまった時は、「ありがとう」と「ごめんね」という気持ちを持って、供養する(土に返す)様にさせている。
空から見守り	知人が亡くなり、お葬式に行く時にはお別れをしに行く事、体は動かなくなっても心(魂)は存在していて、お空の高いところから見守ってくれてる話をした。 子供が3歳頃に、叔父を亡くしました。その時に「叔父ちゃん死んじゃったよ。悲しいね」と子供に話すと、とても悲しそう顔をしてました。いつもは元気に、周りの様子も子供ながら悲しそう感じてたようです。あとから「叔父ちゃんは、お星さまになって空からみんなを見てよ」と教えました。納得したような顔で、天井を見上げてました。
テレビ	テレビで「小児病棟での闘病記」とか「貧しい国での苦しい生活の様子」などがあるときは、一緒に見て、話をするようにしている。 毎日、TVのニュースで殺人や自殺、虐待など放送されています。できれば子供の目や耳に触れさせたくないと正直思います。が、そうもいきません。これが現実、今の世の中であるのなら、そんなニュースなど一緒に見た時は、「これは、当たり前のことではないよ、命は大切だよ」というふうな言葉を、何回でも話します。
機能の停止	教えるというより、祖母、祖父が他界しているのだから、自然に話が出る。「死んだら、もう逢えなくなって、話もできなくて、さみしいね。だから、あなたが死んだら、ママやパパも友達もかなしくて、さみしいんだよ」など…。 死ぬということは、その人や生き物と遊べなくなる(会えなくなる)ということと教えています。「さみしいね」「かなしいね」と子供に分かるような言葉で説明してあげています。
葬儀に参列	法事や近親者の葬儀など、できるだけ参加させ、体験させるようにしている。 年末に身内で死産した人がいて、その時に赤ちゃんが死んじゃったということを教えた。特に死について話すことはないが、不幸があれば葬式にも行くし、なんで亡くなったかということも伝える。
不可逆性	死ぬということは、…(中略)生きていないこと。死ぬともう生きていけないこと。(祖父が亡くなった時に息子に説明)かたつむりもどじょうもトンボも心臓があって元気に生きている、とてもだいじないのちをみんなもっていることなど… 命は1つしかない大事なもので、死んでも絶対に生き返らないものと言いきかせてます。○○が死んだら、ママもパパもすごく悲しいからね!と言っています。
絵本	4歳になったばかりの子が「ぶたばあさん」という絵本を読んだ時に「死んじゃうといなくなっちゃって淋しいね」と言っていた。 「いのちの大切さ」というのは、「他人や自分を大切にすること」とつながっていると思うので、まず今はお友だちを大切に仲良くできるように表現していけたらと思いつながりながら接している。いいなーと思う絵本(昔話etc.)はよく読み聞かせする。
言葉	最近、TVのマジンジャー、ボークンジャーを見たがり、見せると「殺る!」とか「死ね!」とか「良くない言葉」を覚えてしまい、見せたくないと思った。意味が分からず使うので困る。 「死ぬ」という言葉を軽々しく使わないように話した事があります。生きたくても生きられない人がいる事、今自分がこうしている幸せなど話しました。

注) アンダーラインはキーワードとして使われた言葉を指す。

共有されているものと（そうしたマスコミなどでの言説が影響しているのかも知れないが）思われる。これは幼稚園や保育所でののちの学びと共通する内容であり、家庭と施設とで一緒に学習したり、連携したりする可能性の開ける部分ではないだろうか。この点では第10因子の「絵本」も同じである。この因子には「人に対する思いやり」や「友だちと仲良く」といった内容の「人間関係」のカテゴリも高い負荷を示しているが、絵本や人間関係重視の態度は幼稚園や保育所での学びと親和性が高いものであり、その意味ではこれは「幼児教育」の因子と言ってもよいかもしれない。

第5因子は、亡くなった人は「空から見守ってくれている」という語りを指し、第1因子に表れたような伝統的な教えが衰退した後の現代的な死後観といえよう。数としてはさほど多く見られなかったが、仄聞するところでは、現代ではかなり一般的な語りであるようだ。語りの内容はほとんどその一言に尽きるので、死後観というには安直かもしれないが、宗教的な土台を失った現代人にとって貴重な代替物の役割を果たしてくれる言葉だといえるだろう。

第6因子はいのちの学びの媒体としてテレビが用いられているタイプであり、ドラマやドキュメンタリーと一緒に観たり、ニュースで事件が報道されたときに話をしたりするというものである。第11因子の「言葉」は子どもの「死」に関する言葉遣いを気にしたり注意したりするというものであり、やはりテレビやゲームなどの媒体と深く関連しているが、こちらはそのネガティブな影響について苦慮する内容となっている。この2つは良き

につけ悪しきにつけ、現代社会の世相を反映したものといえよう。

第7因子と第9因子にそれぞれ高い負荷を示した「機能の停止」と「不可逆性」は、どちらもキーワードからではなく、著者が死の概念に基づいてカテゴリを構成したものである。死の本質的な性質（死の概念）としては、3から5つの要素が指摘されることが多いが、特に機能の停止、不可逆性、普遍性の3つがよく用いられる(Speece & Brent, 1984)。簡単に言えば、機能の停止とは死んだら感覚や感情や運動の機能が失われること、不可逆性とは死んだら生き返らないこと、普遍性とは生命あるものは必ず死ぬ（死なない人はいない）ことである。共通のキーワードに基づいてカテゴリを作成した後で、残った回答を吟味したところ、単語レベルでは共通のものは出て来なかったが、機能の停止を意味する記述（「死ぬと〇〇ができなくなる」）と、不可逆性を意味する記述（「死んだら生き返らない」「命はひとつしかない」）が複数あることが分かったため、それぞれを独立のカテゴリとして構成した。

第7因子には「機能の停止」とともに「悲哀」のカテゴリが高い負荷を示した。後者は「死んだら悲しい」「さみしい」という語りであり、この因子に典型的に相当するのは、「死んだら〇〇ができなくなって、悲しいね」という語りかけである。また、第9因子には「不可逆性」とともに「汎生命」というカテゴリが高い負荷を示した。「汎生命」はいろいろな生き物に「命がある」という内容を特徴とする語りであり、これは虫を殺したり動物をいじめたりすることを戒める文脈で用いられることが多かった。したがって、この因子

に相当する典型的な語りは、「どんな小さな生き物にも命があり、死んだら二度と生き返らない」というものである。この2つの因子は

いのちの本質を子どもに伝えようとする、親から子への語りかけの典型を表すものといえる。

IV. 考 察

幼児の保護者から得られた家庭でのいのちの学びに関する記述を分析した結果、前述の通り、11のタイプが見いだされたが、内容を検討していくと、それらはさらに4つのパターンに分類することができる。

ひとつは宗教に関係するパターンであり、教えとしては、日本の伝統的な死後観とキリスト教の教えが見いだされた。前者は都市化と核家族化の影響を受けて、近年急速に衰退しつつあるもので、八戸と盛岡という地方都市における今回の調査でも数的にはわずかしか認められなかった。地域によってはまだ色濃く残っているところもあると思われるが、おそらく今後増えていくことは期待できないだろう。キリスト教の方も数はわずかだが、日本ではキリスト教の信者数は長らく人口の1パーセント未満に留まっているので、今後少数派のまま維持される可能性が高いのではないだろうか。

一方、教えの面は衰退しても、墓参りという儀礼はまだ根強く残っており、その機会に亡くなった人について話して聞かせるという、家庭ならではのいのちの学びが行われていることが分かった。また、それをより意識的に行うタイプとして、子どもをあえて葬儀に連れて行くというものも見られた。死の研究においては、核家族化や病院死の増加により、日常生活から死が隔離されていることが

問題視されるが、そうした問題意識は現代の若い親たちにもかなり浸透していることが分かる。墓や葬儀の形態は近年多様化してきており、今後墓参りのあり方も変わっていくことは予想できるが、何らかの形でこの学びは続いて行くであろうし、そうでなくてはならないと思われる。

次に、幼稚園や保育園での学びと共通するパターンとして、生き物の飼育と絵本、他者を大切にすることが見出された。生き物の飼育については、特に死んだ時に感謝の気持ちをもって土に埋めるということが重視されていた。濱野(2008)が示すように、可愛がっていた動物の死は子どもの死の理解を促す貴重な機会となり、また、子どもはその時の大人の対応をよく覚えているものである。瀧川・高内(2002)によると、保育者の大多数は飼育動物が死んだ際にはそれを隠さず、子どもと一緒に観察して話し合うように誘い、死について教えることに賛成しているというが、実際にそうした場面に遭遇した場合、実行するのは簡単なことではないだろう。飼うにしても、ただ飼えばよいというものではないし、動物が弱っていく過程にどう関与させるか、どのように埋葬し、子どもに話をするかなど、大切な問題がたくさんある。保育者自身の経験や勉強はもちろんだが、大事なのは保護者との間で共通の認識をもつことではないだろ

うか。都市化している地域では生き物を飼うことが難しい家庭も多いだろうが、保護者の関心は決して低くはない問題であり、一緒に勉強したり話し合ったりする機会を設け、家庭と施設が連携していくことが大切だと思われる。

さらに、テレビやゲームと関係したパターンがあった。いのちをテーマとしたドラマやドキュメンタリーと一緒に見たり、ニュースで悲しい事件が報道されたときに親子で話したりするものと、特にゲームをやる子どもの言葉遣い（「死ね」など）に関わるものがあり、どちらも現代ならではの形態といえる。テレビにしる、あるいは絵本にしる、メディアを媒体とした学びについては保護者のなかにも否定的な意見があったが、多くの家庭にとってこのあり方が身近なものになっていることが窺われた。

最後は親から子どもへの語りかけのパターンであり、内容としては、機能の停止と不可逆性がポイントになっていることが分かった。すなわち、幼児をもつ親が子どもに死とはどんなものかを説明しようとする場合、「死んだら何もできなくなる」ことと、「死んだら生き返らない」ことが重要だととらえられていた。死の概念のもう一つの要素である普遍性については、子どもから聞かれた時に答えることはあるとしても、親から子への語りかけの中には出てこなかった。普遍性は3つの

要素のなかで獲得するのに最も時間がかかるものだが（辻本，2010）、「二人称の死」（大切な人の死）と「一人称の死」（自分自身の死）の理解につながる重要な概念である。簡単に言うと、死の普遍性とは「あなたも私も、誰もがいつかは死ぬのだ」ということだが、これを幼児に言葉で説明するのは困難であり、やはり本来は家族の老いや死を間近に見ることで自然に感じ取られていくものであろう。ただ、核家族化が進んだ現在、そうした環境に恵まれた家庭は少なくなっている。したがって、これへの自然な気づきを促すような環境やカリキュラムを考えることは、幼稚園や保育所、学校等でのいのちの学びにとって重要な課題であるといえるだろう。

このように、いのちの学びが自然に家庭で行われていた時代とは変化しているが、保護者のいのちの学びへの意識は全般的に高く、それぞれの家庭で悩んだり工夫したりしながら営まれていることが分かった。しかし、伝統的な死後観が衰退していること、祖父母との同居が減って老いや死を目にする機会が少なくなっていること、生き物を飼うことが難しい家庭が増えていることなどを考えると、家庭がいのちを学ぶ場としてもつ力が弱体化していることは否めないだろう。幼稚園や保育所ではこうした家庭の実態や要望を理解した上で、家族と手を携えていのちの学びを進めることが大切ではないだろうか。

-
- ¹ 青森県のホームページで公開されている「平成20年度命を大切にすることを育む県民運動推進会議活動報告書」から。
- ² この言葉は兵庫・生と死を考える会（2007）のタイトルからヒントを得ているが、その会の活動では「生と死の教育」という言葉が使用されている（同書p.6）。
- ³ 残りの4割は「覚えていない」。
- ⁴ 少し長くなるが、厚労省によるこの項目の解説を以下に記す。
「子どもは、親しみの持てる小動物や植物を見たり、触ったり、世話をしたりすることを通して、身近な動植物に親しみを持つとともに、いたわりの気持ちを持ち、やがては生命の尊さに気付いていきます。
親しみやすい小動物を飼育したり植物を栽培したりすることを通して、子どもは保育士等と共にえさや水を与えて世話をしながら、興味や関心を深め、自ら関わっていくようになります。また、世話をすることで、その成長や変化などに気付き、感動したり大切にすることを覚えるようになります。動植物がどのようにして生きているのかを考えたり、命の持つ不思議さに気付いたり、生きているものへの温かな感情が芽生えるよう、保育士等はそのきっかけを与えたり、動植物への関わり方を伝えていきます。子どもの興味や関心に応じて、図鑑や関連する絵本などを用意することも必要でしょう。」
- ⁵ この調査の結果の一部は杉山（2008）において発表した。
- ⁶ 回答の中には複数の因子の内容が含まれているものもあるため、その場合はその因子に相当する部分の記述を抜き出した。分割できない場合は、適宜どれかの因子のところに当てはめた。

引用文献

- Cruse, D.R. & Cruse, D. 1982 Parental attitudes toward death education for young children. *Death Education*, 6, 61-73.
- デーケン 1986 死を教える (〈叢書〉死への準備教育 第1巻) メヂカルフレンド社.
- 濱野佐代子 2008 幼児の動物の死の概念と、ペットロス経験後の生命観の変化に関する研究
発達研究, 22, 23-36.
- 林和枝 2010 母親を対象としたいのちの教育に関する意識 ホスピスケアと在宅ケア, 18,
31-36.
- 兵庫・生と死を考える会 (編) 2007 子どもたちに伝える命の学び 東京書籍.
- 甲斐裕美 2003 子どもへのDeath education 小児看護, 26, 1741-1744.
- 梶田叡一 (編) 2009 「いのち」の教育 金子書房.
- 金森俊朗 1996 性の授業 死の授業 教育史料出版会.
- 近藤卓 2007 いのちの教育の理論と実践 金子書房.
- 近藤卓 2009 死んだ金魚をトイレに流すな 集英社新書.
- McGovern, M. & Barry, M.M. 2000 Death education: Knowledge, attitude, and perspectives of
Irish parents and teachers. *Death Studies*, 24, 325-333.
- McNeil, J.N. 1983 Young mothers' communication about death with their children. *Death
Education*, 6, 323-339.
- 中村博志 2003 死を通して生を考える教育 川島書店.
- Speece, M.W. & Brent, S.B. 1984 Children's understanding of death : A review of three
components of a death concept. *Child Development*, 55, 1671-1686.
- 杉山幸子 2008 幼児をもつ母親の「死」および「命の学び」に対する意識 八戸短期大学研
究紀要, 31, 37-45.
- 杉山幸子 2009 大学生の死の不安と死にまつわる経験との関係について 八戸短期大学研
究紀要, 32, 1-9.
- 竹松志乃 2006 日本で行われる「生と死の教育」について—特に、家庭内で行われるデス・
エデュケーションに関する一考察— 明治大学心理社会学研究, 1, 26-33.
- 瀧川光治・高内正子 2002 保育における「生き物の死」に関する教育 聖和大学論集, 30
(A), 117-132.
- 種村エイ子 1998 「死」を学ぶ子どもたち 教育史料出版会.
- 辻本耐 2010 幼児期における死の概念の発達的变化 大阪大学教育学年報, 15, 57-69.
- 辻本耐・中谷素之 2009 幼児期の子どもをもつ親のデス・エデュケーションに対する態度
日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 714.
- 吉田晴彦 2002 「生と死の教育」の実践 清水書院.
- 若林一美 1987 アメリカにおけるデス・エデュケーション アルフォンス・デーケン 死を
教える メヂカルフレンド社 310-327.
- 若林一美 2002 死を学ぶとは 竹田純郎・森秀樹・伊坂清司 生と死の現在—家庭・学校・
地域のなかのデス・エデュケーション ナカニシヤ出版 102-115.